



南總里見八大傳第九輯第四

1 曾 持
600
282



600
282

南總里見八大傳第九輯卷之四十四

東都 曲亭主人編次

第百七十四

定正水路大兵を行る
音音江中の一船を焼く



話表を這時武藏の五十子の城内の十二月五日の早天の陸地の諸將
山内顯定其子憲房足利成氏扇谷朝良千葉自胤四家の隊長
白石重勝大石憲重横堀在村原胤久等各數萬の軍兵を得て下總の
葛飾の真間圃府臺及行徳を投てち向ひて今城内に在る士卒の
三萬餘名を過さるゝ五日六日に至りて甲斐の武田信昌の名代武田
左京亮信隆を首とて近國の野武士伊豆相模の海賊每勢を見
利を測りて身を負て敵を侮る鳥合雲集の客兵を慮り二萬餘名俱

八代傳九輯卷之四十四

宜日よろひの既すでは是これ明日あした日ひの暮くれなりぬらう。那な順じゆん風かぜを賜たまふ死しや。艦かん出いの幾いく時とき候ころと好よくとせん。其その義ぎを詰つ問もんまられとられ。寡くわ君きんの名な代しろをゆるれ。教しよのへと請こ問もんへ。風かぜ外がい道だう人にん領りやうはく善ぜん哉や々々。信しん男なん信しん士し現げん明めい日にちの八はち日にちの暮くれなりぬらう。食じき道だうるで。教しよを更さらんや。明日あした丑うしの時とき候ころよりして。諸しよ艦かん齊せい一いつ漕そう出しゆる。二ふた浦うらは澳あ小せう猫ねこ見みを下くだしね。其その折せ掩えん大だいる。亦また小せうる。順じゆん風かぜをり。益えきく。那な澳あ推おめて遣やん。徳とく而に其その詰つ且かつ黎明れいめいの時とき候ころよりして。俺おれ又また猛まう烈れつに順じゆん風かぜを起おこし。敵てきを火か攻こうふ。便べん宜ぎをなせん。其その餘よのり。前まへ示しる。如ごとく。疑ぎひを勉めんめよか。と。言こと諄しんく。毛もう宣せん示しせ。憲けん儀ぎ額がく衝つは。阿あと答こたへ。示し教しよをけり。ひひ返へ退たいり。寡くわ君きんの反はん命めいせ。さる。教しよひひ。復たがへ。見み参さんま。け。れ。と。告つ別べつあ。身みを起おこして。山やまを下くだり。馬うまを早はやめ。五ご十じゆ子しの城しろへ。参さん隨ずい御ご前ぜん條じょうの趣おもむを迷まる。吹ふえ。上うり。定さだ正せいの。信しん仰やうして。兔う毛けの。杓しやく置おく。露つゆ許もとも。

敢あて疑ぎふ。心こころる。然しから。疾とく艦かん伏ふして。這こ暁せう昏こんより。諸しよ軍ぐん兵へいを分わち。載のま。ふ。ア。七しち。下くだ知ちまれ。憲けん儀ぎの。唯ただ々々と。答こたへ。退たいり。出でる。其その隊たい毎まいる。隊たい長ちやう下くだ知ち。冬ふゆの。日ひが。短みく。夕ゆふ陽やう西せいの。淪りん。一いつ。士し卒そつの。反はんて。准じゆん備びふ。追おひ。左ひだり右みぎを。程ほどふ。七しち日にちの。月つきの。波なみる。時とき候ころ。五ご十じゆ子しの。城しろ内うちの。將しやう帥すい五ご萬まんの。軍ぐん兵へいを。皆みな悉しつ出で盡じんして。陸りくを。離りれ。水みづを。就つく。柴しば浦うらより。大だい森もりを。海うみ上うへ遥とほく。見み耳みみを。乗のり浮うり。千ち百ひゃくの。戦せん艦かんの。布ふ儲たくわる。其その茶ちや石せきの。像ざうく。五ご彩さいの。旗はた八はち色しきの。戦せん幟しゆの。夜よ半なの。浦うら風かぜの。内うちに。緑ろく波なみも。寄よせ。あ。む。晃きら々々と。星ほし影かげの。光ひかりを。争あふ。八はち千せん鋒ほうの。神かみ代しろの。ひ。早はや蠅せう成せいを。魔ま軍ぐん降くだり。伏ふ天あま泰たいら。け。死し例れいも。か。や。と。負おへ。思おもふ。卑ひ心こころの。勇ゆうと。あり。然しから。寄よ隊たいの。大だい軍ぐんの。子こ二ふた刻こくの時とき候ころよりして。衆しゆ艦かん漸ぜん次じの。漕そう出しゆる。二ふた浦うらを。望のぞみ。走はり。第一だいいち番ばんの。先さき鋒ほうの。頭あたま人にん大だい茂もう林りん小せう彦ひこ和わ中ちゆうと。濱はま川がは小せう渡わた鏡かがみ久く新しん附つけの。海うみ賊ぞくの。頭あたま領りやう。

水禽隼四郎緑林錦帆八四郎近範を副として其隊の海賊と俱ふ
 五千餘名巨艦四五十艘あり。第二第三の隊は小幡木工頭東良士
 宰相従ふ者五千餘名大石源左衛門尉憲儀士平八千餘名有名の
 兵頭是も従ふ者數々あり。第四番は定正の長男上杉式部少輔朝寧を
 副將として武勇の老兵眠近の青侍華美小探甲する者一百餘名雜兵
 と俱ふ一萬二千餘名あり。第五の隊は總大将扇谷修理大夫定正隨從の
 兵頭箕田源次兵衛后綱信城左衛門連頼九本佛九郎望洋城峰麻
 生介廣原是也と宗徒の隊長として従兵二萬五千餘名總軍五萬餘
 れは千百數十數箇の巨艦あり。真帆賜く。白浪不轉る舵の响高工們の諷ふ
 棹の歌皆野干玉の夜を犯して衆艦三浦の澳邊に造る。豫風外道
 人の契り風術差ふとる。猛可順風吹起り。投方便宜にければ船工の

都て鳥夜は怒る。三浦の澳に到る。武田左京亮信隆の艦を先
 最遅に始り。諸艦は續く。胡意遙引下る。那身の隊兵のを
 舟の艦を穿く行後れ。浦河の澳に猫見と下る。風の吹更る。俟りし
 定正朝寧の諸艦の隊長士卒を波よ暗に紛れ。是を知る者
 るるけり。然に寄隊の諸艦は既順風吹送られ。その曉寅の初刻に風く
 三浦の澳にあり。衆艦都て帆を縮。猫を降し相歌。風外が約束の順
 風の亦復吹起る。其天の明ると俟ける。開が中仁田山晋六武佐の敵の
 戦艦を燔盡す。火薬の頭人あり。柴薪燔硝と多く積載する。二三
 十箇の快船とあり。且千代丸豊後の保質ある老婦人音音と豫り守
 ず。前日にも柴浦に在り。あるは。這晋六武佐の其性酒を貪り。且
 酒癖あり。れが當役を兼一日も過失あるを恐れ。絶て酒盃を採る

ともりし既中^{おぼ}。士月七日^{しげつしちにち}の下^{した}晡^ひ不造^{ふぞう}りて同船^{どうせん}身隊^{みんたい}の兵^{へい}多^{おほ}ふ向^{むか}ひて
 中^{ちゆう}我^{われ}をゆえ^{ゆえ}汝^{なん}連^{れん}の連^{れん}日^{にち}勤^{きん}務^む多^{おほ}まり^{まり}り^りれ^れい^いと^とる^る疲^{つか}勞^{らう}さ^さる^るん^ん既^{すで}は^は是^{こゝ}今^{いま}
 宵^よ真^ま夜^よ半^{はん}の^の大^{だい}將^{しょう}御^ご艦^{かん}を^を出^いさせ^せぬ^ぬ人^{ひと}も^も我^{われ}も^も従^{したが}ひ^ひま^まり^りて^て死^し活^{かつ}の^の境^{さかい}不^な赴^{しゆ}ふ
 切^きく^く嗜^し酒^{しゆ}入^いとも^も思^{おも}ひ^ひの^の隨^{したが}ふ^ふ喫^くむ^むも^もあ^あら^らば^ば何^{なに}を^をり^りく^く胆^いさ^さ肥^ひして^{して}密^{ひそ}着^{かく}と
 忘^{わす}れて^て死^し地^ぢ不^な就^{しゆ}く^く忠^{ちゆう}戦^{せん}を^を致^{いた}す^すや^やあ^あの^の故^{ゆゑ}不^な我^{われ}既^{すで}は^は奴^{やつ}隸^{れき}毎^{まい}不^な吟^{ぎん}吟^{ぎん}く^く其^{その}頭^{かぶ}の
 准^{のり}備^びも^もあ^あら^らん^ん先^{まづ}や^や和^わ郎^{らう}考^{こう}と^と献^{けん}酬^{じゆ}を^をく^く醉^{すい}を^を盡^{つく}して^{して}解^{かい}纜^{らん}と^と等^とん^んとの^のふ^ふを
 大^{だい}家^かう^うち^ちづ^づて^てその^{その}辱^{はぢ}は^は脚^{あし}計^{はかり}ひ^ひか^かへ^へ然^{しか}ら^らば^ば御^ご酌^{しやく}仕^{つか}へ^へんと^と及^{およ}ぶ^ぶ間^ま不^な奴^{やつ}隸^{れき}の^の輩^{はい}
 が^が酒^{しゆ}を^を湯^ゆの^の酒^{しゆ}菜^{さい}と^と出^いて^て梅^{うめ}を^を排^{はき}る^る船^{ふね}の^の内^{うち}客^{きやく}の^の間^ま特^{とく}不^な狭^{せま}けれ^れば^ば音^{おと}音^ねも
 膝^{ひざ}と^と並^{なら}べ^べ居^ゐり^り當^{あた}下^{くだ}仁^{にん}田^{でん}山^{さん}晋^{しん}六^{ろく}と^と孟^{もう}孟^{もう}と^と執^{しやく}抗^{かう}が^があ^あら^ら音^{おと}音^ねと^と見^みる^る合^あは^は笑^{わら}て
 昔^{むかし}の^の知^しら^らぬ^ぬ今^{いま}は^は是^{こゝ}枯^か樹^{じゆ}不^な降^ふる^る雪^{ゆき}の^の白^{しろ}髪^{かみ}額^{かぶ}不^な寄^よる^る波^{なみ}濤^{たう}松^{しょう}柏^{はく}の^の肌^{かわ}膚^ふ不^な
 不^な思^{おも}へ^へも^も酌^{しやく}の^の婦^め女^{によ}子^こ不^な極^{たぎ}れ^れり^り是^{こゝ}節^{ふし}と^と指^さ出^いせ^せ音^{おと}音^ねも^も俱^{とも}不^な微^{かろ}笑^{わら}く^く

嗟^{あは}夫^は脚^{あし}見^み出^いし^し不^な與^{あつ}り^りま^まり^り恥^{はぢ}く^くを^をゆる^{ゆる}る^る足^{あし}駄^だの^の端^は緒^つ不^な敗^{やぶ}高^{たか}索^{さく}も^も時^{とき}の^の用^{もち}
 亦^{また}達^{たつ}者^{もの}あ^あら^らん^ん相^あ心^{しん}か^かぬ^ぬ聆^{りやう}娘^{ぢやう}役^{やく}梅^{うめ}香^{かう}る^る枯^か野^のの^の密^{ひそ}房^{ぼう}非^ひ如^{ごと}刺^さと^とも
 甲^か斐^ひる^ると^とそ^そ不^な甘^{あま}る^る喫^くめ^めされ^れと^と戲^{あそ}ぶ^ぶる^る十^{じゅう}分^{ぶん}不^な節^{ふし}も^も溢^{あふ}る^る老^{らう}女^{によ}も^も煉^{れん}不^な
 大^{だい}家^かや^やと^とう^うち^ちの^の貞^{せい}と^と受^うけ^けの^の流^{なが}る^る行^ゆ更^{さら}も^も現^{げん}是^{こゝ}酒^{しゆ}の^の狂^{きやう}藥^{やく}を^を礼^{らい}不^な始^{はじめ}り
 乱^{らん}不^な終^{はつ}る^る武^ぶ佐^さ素^そより^{より}強^{かう}飲^くる^る不^な隊^{たい}の^の兵^{へい}も^も威^い高^{たか}量^{りやう}を^を吞^のと^と死^し大^{だい}蛇^だの^の如^{ごと}く
 刺^さと^と恰^たも^も蜂^{はち}不^な似^にる^る不^な音^{おと}音^ねの^の喫^くむ^むを^をよ^よく^く提^{てい}擲^{ちやく}と^と昔^{むかし}採^{さい}る^る杵^{きね}柄^{へい}の^の異^い言^{ごん}謡^{うた}不^な
 あ^あら^らん^ん不^な貞^{せい}を^を添^そえ^える^る早^{はや}歌^{うた}不^な舌^{した}も^も遠^{とほ}ら^らぬ^ぬ武^ぶ佐^さと^と俱^{とも}不^な衆^{しゆう}兵^{へい}乱^{らん}醉^{すい}して^{して}船^{ふね}不^な先^{まづ}
 不^なて^て反^{へん}吐^とと^と突^つく^く不^な額^{かぶ}と^と敲^{たた}く^く呻^{うめ}吟^{ぎん}く^く不^なの^の艦^{かん}の^の間^ま不^な侍^{しやく}り^りる^る雜^ざ兵^{へい}奴^{やつ}隸^{れき}舵^か不^な高^{たか}
 師^しも^も罇^{かみ}を^を敲^{たた}け^けと^と足^{あし}を^をと^と知^しら^らぬ^ぬ殺^{ころ}す^すを^を不^な編^あむ^むと^と好^{この}む^むる^るを^を思^{おも}ひ^ひ比^ひ自^{みづか}悉^{しやく}醉^{すい}
 臥^ふす^す。喚^わぶ^ぶも^も忘^{わす}へ^へも^も掖^えけ^けも^も起^おこ^こす^す死^し人^{にん}不^な仁^{にん}田^{でん}山^{さん}晋^{しん}六^{ろく}們^{めん}既^{すで}は^は日^{にち}の^の昔^{むかし}吞^のれ^れ更^{さら}不^な更^{さら}不^な更^{さら}不^な更^{さら}
 主^{しゆ}將^{しょう}定^{てい}正^{せい}の^の衆^{しゆう}艦^{かん}の^のゆ^ゆえ^え已^いが^が與^あら^らぬ^ぬ火^か茶^{ちや}の^の船^{ふね}も^も比^ひ皆^{みな}定^{てい}正^{せい}不^な従^{したが}ひ^ひて^て俱^{とも}不^な漕^{そう}去^き

八代傳九轉卷四十四
 五

夫を知らば獨武佐が乗る船の舊の終て柴浦不在の只音音の酔
 ざれば枕を乱して熟睡とある武佐們を相て嗟嘆不堪む肚裏も思ふ
 這仁田山晋五武佐の六稔以前戸田河を我兒子等故十條カニを害する
 仁田山晋五が弟ゆき大石親子仕へぬる二代の權宰と家人の噂も知り
 然れども這奴の火薬の頭人自家の為小害ある者之這奴が預る火薬の
 船の方僅寄隊に従ふも潜去りれども時臨を這奴が存する故火
 頭人竟故先小たたる火薬の船の便宜と喪然然とそかくを酔て睡
 晋五も醒も果ぞ刺殺さば姥ととも武士の妻も似けずと人々挾
 せん要をあれと尋思を考む掛耳と張灯の光も就て船床を鉄砲一挺
 悄と引とせ火線を含る火を移して見れば這鎮砲の両丸さへ籠てあり
 あり究竟と并ぐ依る右のく引着て臂近るける長入盆めて西復以隱る

今更小裏く宵を推鎮めども果一な死のそむその物思ひ曳る單節
 妙真刀自ら衛衛小別も城内へ捉籠らるる後の事安危什麼と人
 傳訪ふりとも浪枕身も浮舟の憂るける西箇の愛孫へはらるる我
 使の今も恙なく大江腋子と共侶枯れり冬野の草枕旅宿して尚京師小
 在歎と思ふのそ中。南末與美の甲斐も別るける。我今寛家の覺を
 俟と計らる如く船を焼けて脱去る暇も我身も俱小火煽もらんそを
 而館莫大の御恩も報ひる老の命を惜んや只兩個の孫兩個の媳小別
 鴛鴦の劍羽や竟水小身を果も過世せよとへば木品打ち波濤ふる
 だの雨も垂氷ふるん冬の夜の浦風寒と群知鳥慰めめせ友喚ぶ鼓耳の狂
 方何処星光り天小餘波の銀漢俯仰瞻々點頭々夜ハ旦三刻と過給小
 け。這白徒等も醒や疾々覺よと思ふと言ふ出さも咳くのそ叔母とて



銃口其方へ推向け。雄胆魂氣聲聲悍々。若們驚に噪るを伎倆の既
知ら。今武佐が奸計の反て是我実情。我を誰か思ふら。是義小戸田の河
邊。武佐が兄仁田山晋五が緝捕の兵と血戦。竟に戦死をりける。
十條力二郎尺八が母大山道節が舊老僕。今に里見殿の家臣。燒雪
代四郎が妻音音の我。武佐は冤家の羊隻。思ひ知るや。明々地。名告
被々銃砲の火蓋を鑽く。控と發せ。那時邊。這時速。武佐は驚慌て
立ち去る程。あるく。吭と撲地と。撃を抜れて。叫びも果を仆れけり。吐嗟となり
隊の兵。毎の音音と捕捕んと。推綱籠る。向もあうせ。音音の銃砲。合
更して。船の内。積措れける。裏の火。茶の擲りて。身を仰。船より。海へ水と
飛入りける。其水音と。共侶の火線の。燈兒許。其裏の。硝火。燃程る。
這時速。猛火激烈。威勢迅速。現百千の雷霆。一度。小隊。る。異るる。

い
い
い

人のち之柴さ。船さ。一瞬間。燒盡され。遺る。僅に。船底。水。道。音音。さ
着る。や。の磯。瀾。測り。死。活。の。海。水。渡。の。建。れ。ぬ。迹。を。破。る。り。け。る。
第百七十五回 旗と建て豊俊定正を馬心
却説犬村大角礼儀。那日の早天。五十五子の城を立去り。先谷山。赴。け。り。
大法師と商量して。隨即。所。從。の。雜。兵。二。名。を。安。房。る。洲。崎。の。陣。營。へ。遣。
あて。那。の。壽。策。の。成。ま。る。よ。と。大。阪。毛。野。に。告。げ。け。り。開。か。り。來。ぬ。と。俟。ん。と。駈。け。
相。摸。路。に。赴。け。り。便宜。の。浦。邊。に。在。り。程。次。の。日。の。夜。に。至。り。て。兩。個。の。使。の。雜。
兵。と。俱。に。堀。内。雜。魚。太。郎。貞。任。の。隊。の。兵。三。百。餘。名。を。領。く。快。船。を。用。ひ。て。
了。約。束。の。浦。邊。に。在。り。犬。村。に。對。面。し。て。則。義。成。の。密。証。と。毛。野。の。意。衷。を。叫。
び。傳。れ。使。に。建。け。り。雜。兵。を。毛。野。の。回。翰。と。令。出。し。て。先。大。角。に。呈。覽。し。且。其。反。

命と眞本を是れ申り大角の其言を聴其書を閲して貞住が無き快然の
安房へ返して一箇も留りて隊の兵を皆東西へ分ち潜せり水戦の日成俟つ
程に既して大角の洲崎の陣の事光景及大坂毛野を軍師小做さる自
餘の七武士の防禦使するに並大角も賜る免御大刀を現八小渡一お
大飼の犬塚と共に召し國府臺の敵と俟つ那地の防禦使するに毛野が是を
與りて權且藏措さるる則今番の便宜を以て城内貞住の是を渡與りて
大角の傳へる大角の其君命を承りて這賜を受する其悦びは倍もあらず
又只是等のものをもて大塚信乃大飼現八と東辰相杉倉直元と俱に
義通君小俱にまゝに國府臺の城の敵と迎るる又大川莊介大田小文五と
仍徳口の出陣して俱に敵と俟つと云水陸の隊配との餘の事千代丸豊俊
仍にまる毛野が反間の計畧又這密策預りぬ浦安牛助友勝音音曳

大坂
大角

てひとよと申すあんてはあかひ
と單節妙真の敵地へ赴けりまもこの時具の妙を大角深く感佩
して貞住の情語を聞き如くこの一策の則是苦中の苦やて危も
最始の故何となく音音妙真兩媪と曳の單節女兄弟が千代丸豊
俊の密使と偽唱へ柴浦へ至り時定正必保質や件四個の婦女を
城内に留め置くべし恁而水戦の日に至りて定正焼れて敗績を脱れり五十子の
城へかゝる來り必怒の堪ざりて音音妙真曳の單節を戮さるることを恐るる
れが犬坂が計る所則自家は勇婦四名を售て徒其死地へ入るの事抑又危から
ざる然りとてこの日小危をのり黄道吉日と事危ければ必慎む慎む時の
失算大坂の理を知ざりて切の苦計を以て又あつた大坂一舉の
敵を破らば外を追ひて五十子の城を拔死に段ありて苦計を以て定正
城へ入ることを恐るる城兵防禦は他事あり何人の亦暇あり四個の勇婦を害

せんや。己と知り又敵を知り。大阪が計る所必也違ふべし。非如他あり及ぶも。我も亦水戦の一計小與れ。然るも四個の女流小も軍功及び二の町を六生く。安房へ還るべし。後思ひ出。美をあらね。と告る意。哀小貞。住の有理々々然。然も七と答く。感嘆あらけり。是より大家影を隠し。跡を埋。ゆ。俟つ程。十二月七日。お作り。大村大角。礼儀の堀内。雜魚太郎。貞住と共。侶。甲。曹。身。を。固。め。隊。の。兵。三。百。餘。名。と。て。新。井。の。海。邊。邊。に。赴。き。貞。住。と。隊。の。兵。を。先。遣。し。俟。た。し。こ。こ。に。お。り。大。角。の。宵。初。更。の。左。側。に。雜。兵。十。名。許。を。從。て。新。井。の。城。に。赴。き。城。門。を。敲。き。吸。る。是。は。今。番。扇。谷。殿。新。附。の。野。武。士。の。頭。領。赤。品。百。中。と。吸。吸。者。半。來。足。柄。多。武。澤。小。治。の。同。志。の。母。を。駈。集。集。來。き。明日の水戦。先鋒。と。す。ま。の。美。前。日。山。内。殿。より。當。城。へ。通。達。せ。れ。し。頭。定。主。の。付。掣。の。小。在。り。の。美。京。一。の。と。を。吸。門。ひ。げ。當。下。門。衛。の。士。卒。是。を。ち。吸。心。と。女。合。は。

左右の容れ。隨即門卒と走り。悠と注進。あぐれ。這新井の城主。三浦陸奥守義同。ち。吸。の。美。山。内。殿。より。謀。合。さ。れ。し。け。れ。今。の。疑。ふ。く。も。あ。ら。な。い。然。し。今。の。世。の。人。心。由。断。せ。後。悔。あ。ら。ん。咱。先。對。面。し。其。付。掣。相。く。艦。を。借。せ。一。登。下。兵。每。其。赤。品。百。中。と。伴。當。一。兩。名。の。門。内。へ。入。る。工。を。饒。一。ね。必。由。断。せ。し。身。甲。の。上。に。獵。衣。烏。帽。子。を。令。裝。ひ。小。刀。を。腰。に。跨。へ。り。力。士。十。名。許。を。從。へ。玄。關。小。守。程。小。近。習。の。燭。を。秉。て。先。小。大。刀。を。執。り。後。小。跟。く。小。心。警。備。さ。し。り。け。り。小。程。小。護。門。の。士。卒。の。君。命。の。趣。を。大。角。小。傳。へ。示。し。て。那。身。と。伴。當。一。兩。名。を。角。門。より。裡。面。へ。入。り。せ。て。玄。關。小。案。内。を。ま。當。下。大。角。阿。容。さ。る。色。を。引。て。玄。關。小。守。登。る。小。點。一。連。ね。燭。台。は。是。光。星。小。異。る。上。坐。の。城。主。義。同。登。見。小。死。を。撰。く。存。り。左。右。小。侍。る。力。士。們。の。狼。の。如。く。小。見。え。の。蚬。の。像。く。小。疾。視。へ。る。面。魂。凡。庸。る。と。近。習。の。主。の。後。方。小。居。執。

い
の
し
ま

由本事ある者らんと見えざるものなりけり。既に大角の程より先か、我
同みぐる聲を被て赤岳百中との和郎多やと向へ大角額衝たる頭を拾は
然の頭定主の齋せあり。借船の符契あり在り。いづれを戦艦十艘と焔硝
柴薪を借す欲まの義を仰付させんとて、義同點頭て。その義の豫め
るゆゑ、和郎の隊の兵幾名多やと向へ答へ。然し同盟の毎の二百餘名
いを近海邊に留めおとせ。小可が伴當の僅に十名を夜合の憚り
あれんと。聊退れ。馳て鎧の懷録より符契を合出せ。星丸一個
近習身を起し。把て主君の呈圖あるを義同やと受合ひ。近習
多燭を抗さず。懐より多隻符を出し。自他合を見て相違なしと。獨言
は符契を藏め。又大角に向ひ。持參の符契の疑ひを敢異
議さるもの。艦の昨日より準備せ。焔硝柴薪と共に遠く馬頭

上を在り。旗幟の甚麼を。と向へ大角。然し其三種の扇谷殿に
預けぬ。ひひを相携へ。只脚艦と柴薪を。貸し。物足の
と。推辞を義同やと。そその準備あり。我艦に水幟を建
て。人小貸え。且愚息義武の項者風寒。感冒されて。病牀を出
ね。兩館領家の催促に従ひ。他は。我を。送憾方。方
の。義武。代る。免。勇士。を。黙止。和郎。今。我。艦。に。乗。り。先。鋒。に
找む。幸ひ。我。亦。兩。館。の。兵。頭。に。雄。兵。四。五。百。名。を。授。け。俱。に。戦。ひ。を
幫助。く。と。大。角。推。林。め。り。并。然。る。故。も。小。可。今。番。兩。館。領。の
免。為。死。を。敵。を。敗。ら。ず。欲。ま。今。他。兵。を。雜。へ。素。より。望
む。所。あり。且。小。可。の。扇。谷。殿。の。先。鋒。也。當。家。の。加。兵。あり。縦。艦。を
借。ると。當。家。の。水。幟。を。建。れ。ん。亦。事。の。宜。し。也。這。理。を。思。ひ

八天傳七集卷四十四 十一 文英堂藏



大角謀く船艦を借ゆ

十三



大角謀く船艦を借ゆ

大角謀く船艦を借ゆ

ありと氣色を度て論ぜられ義同一霎時沈吟して実ふらるれど其理
 あり和郎一器量微りせ。這席上の孤客ふり。我れ對ひて憊まき不意衷を
 送さし論せぬ武勇の願て望み任せん疾々退りひへま。馳て士卒の吟唱
 準備の馬頭上へ送りされ大角面を和らけて開きみれば郎君の御次
 安を猶も御保護あれ。と口誼を舒別を告ぐ外面退り出れば城兵五六
 名蕉火を振照し大村主僕を角門より出さく馬頭上へ送る程堀内雜
 魚太郎貞住の二百個の隊の兵と俱に甲夜より這頭へ俟て居り這海濱へ
 維せし新井の戦艦も中へ西管領の需不応者準備の艦十餘艘あり
 其一艘多焰硝柴薪ありと船小屋より番卒出て大角へ遞與せし
 貞住も共侶の執ひを述受會々其艦毎に士卒三十名づ分ち乗せし
 各各携多る弓箭火銃器械あり且楫を合し艣を操る舵工も一

かりされ渺茫大洋の闇に迷ひ至齊々と艣拍子揃へて漕出ま夜はま
 丑不過さけり有徳一程小三浦義同の獨子あり。三浦景二郎義武。今
 宵も尚病牀に垂れ籠る在りける。件の事の趣をうち穿しより送恨小堪ねら
 横見搔遣り身を起こきて枕方近く措せし。鎧を合々身を固め太刀を
 佩に一具あり兜を看病の女房が持せし。走りく親の身邊へ跪きま
 景二の本音然として稟を申す。當家は是人も知る西管領の親族なる。今
 今番の戦小値さる見が病着の故や。是非の及ばぬ所なれども赤品百中
 とう喚做る相模野武士の先を馳せさせ。我艦と貸て乗せさる。あより一
 隊の軍兵をも出遣りぬる。其甚麼をや。今より艦を出させ。海へ浮し身
 方の大兵と等しく明日の先鋒に找ん暇稟まとの。既小立まきあけけるを
 義同急喚禁めぬ。若ね義武和郎の送恨の然り。身小猶熱邪を

憶を戦栗る。肌膚粒疎色蒼然と。身の生るごとく。鮫見出るると思ふ可小
堪ぐれば。弓合をなまし研らる如く。其弦凍く断るもあり。獨り艦隊の
主將る。三浦暴二郎義武。今茲十八歳の少年なれども。武勇力藝親小
劣らざる。勇ハ萬騎小敵をく。膂力ハ千鈞を奉る。小堪たり。渡莫今宵の
病後也。出陣心許ると思ふも。幸小一。其の曠昏より。寒熱共小
瘥り。氣力衰へね。夜風の烈し。物を物とせ。疾百中。小趕着んと。連り小能
工をいとをせけ。然バ又犬村大角ハ有。悠々ト云。知るよりも。既小義同を欺
く。干箇の艦を借り。漕出せども。去向をいそが。堀内貞住と。船を並
り。程小那城内。中より。事の趣。城主三浦義同。同答。議論の顛末。成
悄語々々。告知をれ。貞住以下の老兵。其覺を俱小含笑と。愉快の事
とを稱えけ。浩処小新井の方より。漕りて來ぬ。快船あり。勿心地。聲と發て

八代傳九耳卷四十三

文選堂藏

其首漕ゆく。衆船あり。野武士の長と。少え。赤品百中。もある。倍ハ
我ハ三浦陸奥守義同の嫡子。三浦暴二郎義武。其權且艦と止
り。と喚り。近つて來ぬ。大家。鞍馬く。中。大角。位と見。る。毫も。噪。氣
色。然。赤品百中。の。在。何。の。所。要。を。と。答。る。詞。も。果。然。同。義。武。の
快船。ハ。這。方。の。艦。漕。よ。せ。其。隊。の。兵。も。鈎。索。の。て。曳。を。曳。寄。せ。楫。由。法。
程。も。あ。る。三。浦。の。伴。船。二。十。餘。艘。水。崎。登。人。甲。良。龜。九。小。磯。真。砂。五。等。追
風。不。儘。せ。推。續。に。來。り。犬。村。が。十。許。艘。の。艦。の。前。後。と。捕。圍。と。も。鈎。索。を
一。箇。も。漏。さ。ず。皆。生。料。々。と。掛。留。め。け。當。下。暴。二。郎。義。武。ハ。大。村。大。角。方。向
ひ。く。や。れ。其。隊。の。頭。人。加。勢。の。野。武。士。赤。品。百。中。の。和。郎。る。よ。我。名。の。豫。は。る
ら。我。の。親。の。名。代。也。疾。五。十。子。の。城。へ。參。る。べ。り。一。小。憶。ぞ。風。寒。の。病。着。あり。と。
出。船。遅。々。して。今。及。び。和。郎。ハ。新。附。の。加。勢。中。我。艦。小。乘。る。か。ら。宜。く。我

八代傳九耳卷四十三

十六

文選堂藏

舟
艘
本

のまと言ふ
川を舟

の起る頃風を巻ら程の幾千の艦艦を横亘し一は張燈の波を照らす水
映して魚散電の寄るるべし浩処の洲崎の方より快船一艘漕ぎて
降人と書寫し一は弦掛張燈と指抗しうち振り喚るを是のま安
房の降人千代丸圖書助が密山使の濱馬助と喚做は者火急の言
上あるをのり直訴をなす欲をのり一と公聲共侶不近つ
くと扇谷の士平小船に乗る出迎へり釣留め引て大石憲儀の艦の邊に
おのりて信と注進をせし憲儀則水幕を抗さずして濱馬助の
對面去這馬助の浦安牛助友勝入當下友勝が公堂豊俊豫約しあり
去如く今日も且用の水戦の豊俊里見の衆艦の背より起り火を放
ちて艦を走し但しその折乾の頃風の最も烈しく吹ぬゆゑ豊俊が放火の里
見の衆艦の蒐らぎて向火反り我艦と焼ん然れ豊俊の里見の衆艦を

漕脱て逆く又細く火を放さんその折御艦を打ちまをる俱火攻まある全勝十
二分のべ一ののを謀しもうる復てを推参仕りぬと実一やう説瞞ま
憲儀听り黙頭て躬く小船に乗移り引て定正の艦を造り件のを
告ぐ定正悦び大なるを其義我とあり疾衆艦下知を修
且用の進退を示す豊俊主僕大功あり賞禄の異日の沙汰あり先
この旨を答謀して馬助とありをかへ遣のねとを友勝側聞して憲儀
向いての事既天明の程ありん小可愍安房へ還るる里見の士平を怪
あられて事の破れあり做りぬ縦目今の御答と豊俊不告けむと御同
意なりし事違ふべしをのりてを稟しぬと請ひ憲儀又黙頭て
隨即友勝のよりと定正告ぐ定正の感悦して現其遠慮も謂
あり然れ其馬助と憲儀汝の隊を隸し軍忠隨意をせけれと憲儀異

謀むる。御説養りひいぬ柴薪を積り船毎に既御伴ひへも其頭人を
課する家臣仁田山晋六をいふ事ある。いふ事第一義なる柴薪を頭人
より不便るべし。然れバ晋六が事ある事。這馬助と代りて那役不元ひの便
利不元ひの事。その事何と請問へば定正等々又點頭て現他が王の千代
丸豊俊の既不故火の頭人。且王僕俱不安房人。波上の梓は自由
人。其一役を課る。及て仁田山晋六不優まともあらん退と柴薪船と違
與ねとわらう。頼ふ吩咐れ憲儀唯々と言兼りて船を漕せり退は却友
勝不柴薪船と預け其進退を任ずる友勝の思ふ倍なる。事之首尾の十合
る不笑を忍びし。欽び謝してそがまゝあつた留りけり。左右も程お絳煙引く東
天稍無曉と去ぬ。時候風外道人の約束違を乾のく不天引る横雲の
間よりして勁風颯と吹起り。激波高く艦揺めけ。その期とる寄隊の

大兵寒氣も俱不忘る。もて不孰う欽び勇ざらん。素破乾の順風吹出ると
皆疾猫見を曳抗て寄せよと喚りて位置を守りて漕出ま先鋒の則
當軍の兵頭大茂林小彦和中濱川小渡鏡久士卒五千名並新附の海賊の
頭領水禽隼四郎緑林錦帆八四九郎近範其徒二千餘名と左右の副
とを共小雄兵七千餘名其艦一百許るべし。次は晉領四家老の隨一。左
小幡木工頭東良士卒二千名。次は上杉式部少輔朝寧。小大石源左衛
尉憲儀を副と信城左衛門連頼九本佛九郎望洋。是は不従ふ其兵九千
餘名。次は總大将扇谷修理大支定正。従兵三萬千。百十數名。其田源二兵
衛后綱白峰麻生。小廣原。及阪東。有名の郡司御士の是は不従ふ者
數り。又降人千代丸豊俊の密山使。那濱縣馬助。柴薪船と預け
れ。先鋒不従ひ。找ぬる。武田信昌の名代。武田左京亮信隆。新参の

大傳九傳卷百一十五

九

浮浪人赤松百中と仁田山晋六武佐の中途不障るにあり。秋の時を其
 船見えぬ。定正を首め。朝寧憲儀東良等へは。機密を知ら。老兵
 今うち他考を俟んと。躊躇ふ。寄隊二千箇の戦艦船を轉
 各艚を鳴りて。整て。前後を乱さ。乾の順風。儘せて。徑洲崎。推
 寄せて。稻村。薩田の城を屠り。義成親子の首を捕んと。勇る者なり。け
 事の勢正不足。曹魏江。浮。兵を吞多欲り。胡元海を渡。東不寇
 せ。日。徳。あり。戦世の人の心の死活の海を海とも。波。彼岸遠く
 後の世を思。薄情けれ。

萬里一水道節小仇を射
 八百八人毛野大敵を塵を

却説。の時安房の洲崎。里見の陣。守安房守義成主。昨十

二月七日。小至り。軍師大阪毛野防禦使。天山道節。並兵頭小森。但一
 郎高宗。及諸兵頭。老兵之恩。赦の罪人。故の上總の榎本の城主。千
 代丸圖書助。豊俊。多を召集へ。明日の水戦の隊配を定め。印東小六明
 相荒川太郎。一郎清英。木曾三助。季元。小湊目堅。宗等。も俱。這席。あそ
 與りける。開。中。大阪毛野。獨君命を。諸隊の前後を。配分。先鋒
 則小森高宗。千代丸豊俊。を副。と。毛野。謀る。所。其船。每。柴薪
 焰硝を。積。入れ。放火を。宗。と。と。與。入。次。大山道節。荒川清英。印東
 明相。を。左右の副。と。次。軍師。大阪毛野。木曾三助。季元。是。小。從。軍。の。諸頭
 人の。交名。牧。擧。る。不。違。わ。れ。自。餘。の。五。大。士。と。東。辰。相。荒。川。清。澄。杉。倉。直。元
 田。稅。逸。友。登。相。良。千。滿。呂。重。時。船。船。茂。足。東。峰。春。高。堀。内。貞。住。等。の。陸。地。の。敵。を
 防。人。與。或。の。情。地。謀。と。授。け。他。方。遣。り。中。大。江。仁。姥。雪。與。保。京。師。も。も。か。

時候より乾の勁風起るとありて敵の大兵艦を找めり。其直に推寄せし
 べ。然りとも我諸隊の艦は猶比皆岸に在りて動くべからず其風衰りて其
 ら敵を逆て火を放つを要とす勿論館の御軍令に随ひしり。縦勝に乗
 るとも多く敵を殺さべからず只生物を全功とす。倘違ふ者ありて立地不足を
 斬ん艦を今宵柴薪を積載て旦開の戦飯に各各艦に在りて握飯するべ
 且纏腰飯を忘るべからず。その是の天津九三郎が稲村より来て炊飯の支役
 等不指揮せられし事不礙滞あるべからず。御旨に依りてと言厳不説示せざ
 大家敢異議を有る者共。其言美を志し開が中千代九圖書助豊俊の
 大の日管堂見堀内許より召出されり。その隊に在りて御高の義成主不見参を
 饒れて且恩命あり。今回の開戦の大功あり。舊領城地を返すべしと仰らる。其
 豊俊は舊臣の浮浪して安房上総に在る者あり。其美を知られ。那身一僕も

中。遮莫先鋒の次將を。面目を。其るべ。憊而。その夜の。并火を。焼いて。既。曉
 天。より。一。將帥。義成。主。の。望。洋。臺。より。登。り。て。明日。の。水。戦。を。見。せ。欲。せ。致。仕。老。黨
 堀内。負。約。を。首。と。し。老。兵。士。卒。三。千。餘。名。臺。上。臺。下。小。舟。を。高。張。燈。を。掛。且
 多く。最も。堅。固。不。備。なり。水。隊。の。軍。兵。一。萬。餘。名。八。日。の。曉。天。に。至。り。一。隊。毎。に
 士卒。咸。艦。に。乘。果。る。敵。の。うち。寄。寄。と。俟。程。不。天。の。向。明。と。あ。り。時。候。より。
 乾。の。勁。風。吹。出。礮。打。激。波。凄。しく。艦。を。遣。る。便。宜。あり。ね。士。卒。齊。一
 感悟。して。果。て。哉。軍。師。の。先。見。毫。も。違。は。ず。既。に。乾。の。勁。風。發。り。敵。推。寄。ま
 る。程。あり。下。憊。て。その。風。吹。衰。り。て。其。不。足。を。補。ふ。べ。し。と。思。ふ。都。て。勇。あり。寒
 風。肌。膚。を。冒。ま。し。忘。れ。ず。弓。強。し。潤。し。火。銃。の。丸。を。籠。々。敵。を。俟。つ。威。勢。あり
 振。然。と。介。程。の。扇。谷。の。諸。軍。艦。も。既。に。その。順。風。を。沿。り。疾。勇。する。者。あり。各
 各。正。帆。と。七。八。分。の。風。の。ま。り。走。り。ま。り。比。皆。是。巨。艦。を。の。り。猛。風。洪。波

中も危ふらば三浦の澳より洲崎まで水路五六里不足りぬれが今も一里許
のやあべらんと思ふ程忽地風歇波理りて衆艦都々毫も走りぬ是の
いふと訝る程其風猛可異変りていふ便宜を失ふ折ら洲崎の岸よ
に突然と快船十餘艘漕出る前敵うちも逆の波を横はり一瞬
間小武藏の三漕去りけ是則別人をむ小湊目堅宗が鮫内葉四
郎狙岡様八百と五百の雄兵を従へ目今那地へ渡せけり當下軍師大
阪毛野の二萬の軍兵一千有餘の戦艦と三隊に分ちて鼓を鳴らさせ艦隊
振らせし連の小士卒と找れば則先鋒の頭人多小森但一郎高宗千代九
圖書助豊俊が隊の兵三千艦二百艘波を閉じて漕出させ第一番るる
水幟の降人千代九豊俊と寫せし扇谷の先鋒の艦も大茂林小彦濱
川小渡並水禽隼四郎錦帆八四九郎們のへはらへ後方へ續く寄隊の

衆艦大石憲儀小幡東良將帥正副將戰も是をたす原来千代九豊
俊の順風の便宜を喪ふ故小里見の衆艦の北月より火を放ちしぬるね胡
意找とて先小立欽然るも里見の千平の他を怪しむ制る者も艦と連
ね近つたるぬる故あるところあらぬが疾濱縣馬助と召させし向ふと
喚る聲も果ぬ間小森千代九が隊の頭艦の射る箭の像漕とを俱
準備の小柴火火基を夾きて敵の艦に投入し攻撃せし折ら烈に潮
風も放火の勢一霎時もある寄隊の艦も存る所の柴薪其火程りて發
と煙立ち程もあらば先鋒の衆艦免る者も猛火と做り七焔々を牽
遇突の威勢漕りもるは且猶浦安牛助友勝の扇谷の柴薪と預り
先鋒の艦の後方小在り件の放火發ると見ると同船の軍兵四五名を斫
仆し又斫伏せし左右る艦の柴薪火を放りし猶も柱る敵兵残中る

八代傳九郎長四郎
文藝堂藏

儘せし所殺さ大刀風と共小聲震發て愚る哉定正憲儀寄隊の兵皆
听ね豊俊馬を敵小降ん我其舊臣る濱縣馬助と名告りし実小あ
らぞ軍師大坂の密策小徒あ。定正を哄しぬる。実の里見恩顧の頭人浦
安牛助友勝もど知ざるや。若們の是鳥の群鳥這圈套小入りしれ比皆
禽ふるんのも笑ふべくと喚りらみづる。船と推徳と漕脱る。自家の先鋒小
加りて俱小敵をを攻敷け。余程小風火の焔を寄隊の艦二箇とて
其燬を受ざるもる。一將帥士卒の差別る。こゝろ小とる。小慌噪
らる。度を喪ひて。燬を脱れんと欲りて海小入る者。水小溺れ。命を殞し。
然る風。猛火小身と焦して免る者。極稀る。開が中。小式部少輔朝
寧。心疾に小將入れ。小蠅も艦を漕辟せ。風側より。あて。二浦の如く
脱れ去んと。ある程。小印東明相荒川清英。俱小快船小乘走。せ。二

隊の從兵七八百名返せくと喚り。透もあせ。追蒐來ぬれ。朝寧。近
習外官の老兵。皆只主を敷せ。と。近く敵と斫拂へ。朝寧も亦防箭
射。且戦い且走る。逃る小順風の艦。れば。明相清英。勇る。あ。わ。ね。波の上
自由る。を。敷。漏。ま。く。見。え。る。折。々。犬。山。道。即。忠。與。定。正。を。生。拘。ん。と。く。
連り小艦を找る程。小見れ。落。く。敵。船。あり。明相清英。二隊の艦。を。趕
へ。も。竟。小。及。ぎ。り。け。其。敵。の。旗。旗。水。幟。は。是。紛。ふ。べ。く。も。あ。ら。ぬ。朝。寧。を。を。を。
思ひ。心。の。下。く。い。そ。が。れ。他。の。則。定。正。の。庶。家。子。の。故。主。の。為。ゆ。る。冤。家。に
羊。隻。又。り。も。當。君。里。見。殿。中。是。穉。敵。の。骨。肉。之。疾。敷。捕。ら。ま。印。東
荒川。噫。ひ。實。し。と。焦。燥。と。且。我。舵。を。罵。勵。せ。も。間。遙。小。遠。け。れ。が。亟。小
趕。も。つ。死。が。死。道。即。の。く。焦。燥。と。那。里。小。落。く。敵。の。船。の。扇。谷。式。部。少
輔。朝。寧。と。見。し。小。僻。目。欲。恣。の。我。の。煉。馬。の。舊。臣。今。の。里。見。の。股。肱。の

の
は

臣八士の隨一る大山道節忠與多るを知らずや返せくと喚りて前間を
言ふ程あれども豈脱さんやと執るらひ三人張小十五東三伏多る征前
刺あつ最も易け能彎固る箭尖を敵らあつ波の立る隨小眉尖刀
引提て見うる処を道節即ハ矢聲劇しく彈と射る射られ朝寧一霎
時も堪堪を身を仰反せて大洋小隊水底を沈もけ是を驚其隊の
士卒ハ吐嗟とをりハ劍兒をのり王を極ひ揚んとハ舵を留めりわける
程ハ印東荒川二隊の艦ハ波濤を用ゆる漕を來て乗程り敵を
擇む所ハ就中明相清英の大刀風の中敵兵あるとみれば
船の内ハ平張伏し或ハ跪れ頭を敵ら命を乞ふ者甚くねど明相
清英も笑ひて益の殺生を乞ふと比皆悉く結紐せけり有徳
程ハ道節ハ艦を走せ趕りて來つ這光景を見て喚るや小六太郎一

開ち要する其はる奴們を降さとも生拘るとも殺漢一の何かせん器械
艘舵と奪合を潮のちく流し遣りね但も困せざるべし我射て墮
たる一將ハ他ハ必朝寧らん惜むべ遠前ハ子ハ六落て水底を沈ま
けん首を獲りて悔し先求獵ん求獵まると詞急迫り罵示し
士卒ハ下知して今朝寧の隊ハ四下ハ劍兒を入れて撥撈らる水底深くて
届くハ又小猫を下さる那亡骸を索求めり引棧をさく欲する流れ
まけん船ハ契して劍を求るハ異るを竟其功あるとみれば道節屢嗟
嘆して憊と知る趕迫る必數捕るるハ遠前ハ子ハ悔しと獨言
の士卒等も俱ハ慰難さける前巻第七十回ハ現ハ八箭を抜る當下明相清英ハ
敵兵の器械艘舵と皆悉く捉棄る結紐り隨ハ流し遣る没架船の往
方定ぬ扇谷の士卒等ハ恥を思ひ蜻蛉の命生れと歎び流ハ儘とる

五十四 廿

船の内より共侶の伊豆相模の方と見且して那見上遙小那里へ向く船を我老
館と相て原來定正と相て疾敷を捕んと船公們をいそぐ立てて討つ
順風の舵小舟りる伊豆相模武藏野の逃水へと逃下と喘る心
を勇れける案下との日里見の先鋒の頭人小本林但一郎高宗千代丸圖書
助豊俊の浦安牛助友勝と相俱の寄隊の前後より火を放ちて多敵の
衆艦を焼死に扇谷の先鋒の頭人大茂林小彦濱川小渡其隊は
士卒共侶を焼れ命を殞たる然も寄隊の總大将扇谷定正の
大石源左衛門尉憲儀其田源二兵衛后綱白峯麻生小廣原と近習の
毎のこゝろ又蝮く數箇の小舫小舟乗移り疾五十子の城へ入りんと武藏
投て脱去る井が中第一の隊長なる小幡木三頭東良と頭人九本佛九

郎望洋の隊の兩艦の辛くして燬を逃れりども既其船の焼亡て小舫
由あらざる俱の渾漂り小本林高宗千代丸豊俊浦安友勝並の
木曾三助季元其隊の快船數艘をり透間もあらず趕鬼老高宗
と豊俊の九本佛九郎が隊あり向ひて兵を我れり攻戦し佛九郎望洋の
本事ある猛者なり左右を敷く伏られ其隊の兵も皆死を究めて免れり
本と思ひけん敵の船小舟飛乗々々或は引組を刺送へ或は俱海に入る在昔壽
永の戦ひも倭ありけんと思ひる望洋の近敵を殺拂ひ殺退けり竟千代丸
豊俊と鎗と合ら上二下と迭の奮勇術を盡し而敵の船寄て辟は
辟はての合ふ生死の海潮成を知死期時孰先と目分程不豊俊既不脱
乱れて那身危ふりければ小本林高宗是を見く又蝮く船を合せ合せり遂に
九本望洋を斷敷ふあれども俱軍令を守り首を捕らる敵の殘兵の降

ると饒して。這闘戦の果あり。介程浦安友勝木曾季元の両隊の快船
 二三十艘と飛が似く走りませり。小幡木頭東良の没舵艦を並木香
 桁の像くうち囲み。拘んと競ひ蒐る。東良の毫も怯まぬ。他は是管領四
 家老の一人也。武勇拔萃の雪あり。且其家臣木代漢修大名増瀬五郎
 と喚ゆる。両個の猛者あり。俱ふの隊あり。主僕力を勅せ敵を防
 ぐ。燒む士卒と罵辱る。刃尖鋭かり。友勝季元勇戦と久も。尚闘戦と互
 角中。面敵雌雄を分ざり。然るの時大阪毛野胤智の小幡東良の獵勇
 るを豫より知れ。友勝季元卒介也。捕漏まもあらん。然と其身
 由船を找せり。間近く寄せ合せ。船頭小登見と建さる。鉄をのり輪縁
 あり。軍扇を採り。尻を搦く。端然として立ち居り。然る里見の衆兵は
 是小機をぬき奮勇十倍勝ふ。無さる。開け程浦安友勝木曾季元の俱ふ

かのやう。このあつぎに。そのまま。せごう。と。挑戦ふ。早响許季元竟ふ
 那両個の猛者木代漢修大名増瀬五郎と。挑戦ふ。早响許季元竟ふ
 瀬五郎を。のり。と。斫り。せよ。の時。小幡東良の。鎧の。尖頭。血。濺。近
 づ。敵。幾。名。斃。刺。殺。して。寄せ。立て。今。瀬。五。郎。が。敵。れ。と。見。つ。怨。小。堪
 され。奮。然。と。鎧。合。延。耶。と。聲。耳。う。て。季。元。の。肩。尖。を。鬮。敵。と。刺。さ。刺
 せ。木。子。元。身。と。仰。反。せ。海。へ。交。と。隊。半。六。東。良。の。う。と。鎧。合。直。して。二。三。刺
 ん。と。推。下。ま。季。元。の。水。中。に。敵。の。鎧。の。煙。纏。ふ。楚。と。擣。り。身。を。浮。せ。曳。り。隨。敵。の
 艦。に。跳。り。入。り。其。鎧。の。幹。を。握。扱。て。東。良。の。引。組。で。搦。付。さんと。角。へ。も。東。良。と
 坂。東。の。名。高。る。力。者。へ。けれ。敢。又。物。も。せ。ま。音。小。季。元。と。組。伏。せ。首。を。搦。ん
 と。七。首。と。撈。り。く。接。せ。せ。程。小。毛。野。の。持。方。軍。扇。を。礮。と。擲。り。の。御。錯。は。東
 良。眉。間。を。打。傷。れ。颯。と。漬。る。鮮。血。と。共。眼。眩。ま。仰。反。れ。季。元。下。より。反。復
 せ。厭。々。索。を。被。ち。き。小。東。良。替。力。剛。けれ。其。子。を。扱。で。掙。せ。當。下。里。見。の。雄

兵等及浦安友勝の竟木代漁師太と斫仆して自家の士卒共侶小季元と相
援けて折累りつ東良と緊しく結ねり牽居けり然小幡の隊の兵等の悍死
者既小敷されぬ其餘の敵小殺立られて今東良の虜小做ると極小暇あらざ
れ誰より亦敵中らん皆又と捨脱せり俱小擒小做りおける倭而季元友勝の
生口小幡東良を這方の船小程一乗せて軍師の実檢小入れ小毛野の口官
嗟嘆おの堪き憮然とていひさう現孫子と讀む者非如温順の君子といふも
不仁の心の起らぬなり其人を殺しての己を利する方の教小由れ小現兵を凶
番る哉抑我而館里見殿御親子の今世小又易らぬ仁君小御坐せとも我
毎敵を迎へて死生を争ふは這戰場なり何ぞ仁慈を仍小由らぬ是則亂を
撥り民保る湯武の心小同たべり已免くと獨言る貌を乞と更めて却東良小
向ひてさう小幡生今日の掙死視を敬篤くまき香取愛り我風火の謀をりて寄

て隊の衆艦を焼くより定正王と首あり其隊長諸頭人雜兵至るまで敢敵小中る
者る皆免れり欲する故あて死する者まう然と和殿の乗る船の楫を焼れ故
るべけれど敵中りて血戦して事の小至り一尾櫂の中る真王小似ら我其武
勇を愛るの故小解怒してかへりおとせ和殿一箇と饒一ちと我勝軍の負べも
中るおと我君の御心小我私の慈善とる思ひて兵毎登り其索と早く解き
とにそむが執索の雜兵何と使早東良小被る索とる索とる早解く撥遣り棄れが
東良の身の福小且恥且感謝小堪む姑且して毛野小向ひていひさう思ひさうける慈
悲故免現江湖上の噂小錯らむ里見殿君臣の仁心小至んは是不就ても恥
ある這回扇谷殿の攻伐の侮人們の薦る所我始より其牙を知れども諫聴
るべし小あらざれば心小あらざ我衆と俱小今日の水戦小従ひ小一戦小及ざ
あて既小の大敗あり主將の安危を知るよりさう我身一箇免れりとも今何

いふ

らめがく。故の城地小還人。君辱めらるる。臣死せしむ。齋の田横鳥取。部の萬の義烈あり及ぶ。我も亦然なるの志の致す。已るん。是をせんと。いも。訖らる。備る。雑兵の帶る。大方。見りと。抜合る。も。項。楚と。推加て。み。首と。斫落して。軀。撲地と。俯。ける。思。不。優。る。東良の。勇。猛。義。烈。不。驚。嘆。る。友。勝。季。元。士。卒。們。い。ち。小。森。高。宗。千。代。九。豐。俊。も。既。敵。不。戰。ひ。克。ん。船。と。併。て。在。り。一。這。為。体。を。視。由。听。も。也。俱。不。感。嘆。を。ら。ける。そ。中。大。阪。毛。野。の。憶。も。膝。と。拍。鳴。う。て。嗚。呼。果。せ。ら。る。忠。臣。義。士。の。生。と。厭。ひ。て。死。を。樂。む。志。誰。も。忘。る。そ。あ。げ。れ。定。正。賢。良。る。ざ。れ。ば。仍。ひ。都。て。道。不。違。と。猶。其。大。夫。小。道。灌。也。且。那。助。友。也。又。這。小。幡。東。良。の。あ。を。り。其。大。職。を。失。を。削。ら。る。と。あ。り。い。ど。も。亡。び。る。所。以。先。に。這。亡。骸。を。宅。眷。に。贈。り。て。我。君。の。大。仁。大。慈。を。知。ら。ぬ。ん。兵。每。其。生。口。を。解。饒。して。送。る。這。意。を。告。知。せ。よ。と。い。ふ。士。卒。等。あ。ら。ゆ。く。恩。

赦の一免不及。程小毛野の又航工課。那艦小相忘。かへ航一捷を。擇出さる。小幡の士卒。取られ。東良の殘兵。頭を敲。死。恩。を。謝。して。隨。即。東。良。の。首。と。其。骸。を。拾。起。し。故。の。艦。小。移。一。載。り。別。を。告。ぐ。順。風。不。儘。さ。る。帆。を。揚。ぐ。相。摸。地。投。ぐ。還。り。も。く。船。の。迹。を。如。く。世。間。小。脆。死。の。人。の。命。を。か。て。又。毛。野。胤。智。の。高。宗。豊。俊。友。勝。季。元。等。の。あ。の。日。の。拵。を。答。え。る。各。戰。功。甲。し。り。千。代。九。生。の。舊。罪。を。償。ふ。足。り。ぬ。べ。就。中。木。曾。生。る。い。れ。も。あ。る。は。と。ま。り。杉。倉。公。頼。の。季。子。也。武。者。助。の。弟。も。尚。青。年。を。り。今。番。初。陣。と。少。々。小。幡。東。良。と。戰。ひ。時。水。中。の。拵。に。実。不。奇。し。て。亦。妙。也。藍。より。出。る。藍。より。倉。久。後。負。り。ぬ。殿。其。肩。尖。る。の。淺。瘻。も。潮。水。入。り。これ。風。を。療。治。せ。し。め。く。の。も。船。に。准。備。の。茶。を。合。出。し。て。其。鎗。傷。を。塗。り。ま。ける。勞。勤。も。困。る。と。い。ふ。季。元。深。く。感。謝。し。て。心。八。入。の。勇。さ。け。當。下。毛。野。の。又。い。ふ。

八代傳七昇天四二二

三

大義堂

約莫の聞戦大角が今まで出て来ざるの故りやあらん心許る一獨那人のさあむ
 敵の為小保質おせられ妙真音音曳子單即も恙あむと胸安々疾五
 十子の城小推寄て一旦城を攻合む猶大敵と懲ま不足四婦女安危と訪ふ
 由今勢小乗らばく竟小の圖と失蛇を殺て頭と送去後の患ひあむと疾
 柴浦へ船と找ん諸軍兵の意と浴て先腰戦飯を披べといふを友勝も皆諾
 るて現那四個の婦女子の今も五十子の城小在ん定正逃て城小還ら必敗軍の恐堪
 ぞて四個の保質と殺べいそたの理りたのへ胤智點頭て我も亦始より飽き苦
 計を施さればの田地小届りたり非如定正燬を免れて城小か入るとも只心怯胆
 落て防戦の備とさるる三亟小保質と殺ま暇あがたの美ハ心易らると鮮れて大家感
 佩も但大村大角が三浦暴三郎義武と争ひ安危の事真々び開て又下回解分ると聴ねが

南總里見八大傳第九輯卷之四十二四 終

